

I 研究の意図とその理論的展開(3)

郡山女大家政 関口高左

目的 (1) 社会の変動の中で、生活の様態も亦激しく変化をきたす。この生活の変容を家庭生活における経営面よりとらえ、その史の実態を探り、そこに家庭経営変動の法則性を求める。(2) 家政学の一領域であらねばならぬ生活史の在り方を探ねる。(3) 家庭生活の総合性に対しての家政学の総合研究の研究方法の究明を求める。本論は(2)を目的とする。

方法 全体的には、理論と実態とにより主題の解明をはかる。すなわち、理論は実態の検証を得、実態は理論による修正を経るなどして漸次的検討のなかで目的の達成をはかる。生活史の在り方については、『家庭経営変動に関する生活史的研究』一報掲載の「研究の意図とその理論的展開(1~2)」も基として継続的立論をはかる。

結果 家庭経営の変動について住むことも基盤として空間性より位置づけ、内部空間と外部空間における変動因を明らかにし、加えて時間性よりみると、人の生活は場と時との関係により内因、外因において変化が生ずるという論拠をえたが、生活史についてはこの変化、変容の結節点を綴って編みあげることができたが、その在り方こそは、生活の是非も含めた生活の指針的要素を具備すべきで、家政学の本質的一部門である。(1) 家庭生活の偶然性と計画性。(2) 計画性に対する経験の資料的意味。(3) 生活改善の極りどころと生活実態。(4) 人間生活の主体性と家政学。(5) 生活の法則性と家政学。の六項目により生活史の在り方を検討し、家政学の一領域としての生活史の重要性を確認するに至った。